未来への航路

宮城県慶長使節船ミュージアム サン・ファン館 館長　平川 新（ひらかわ あらた）

㉟ローマ教皇謁見（えっけん）と歓迎パレード

大歓迎された支倉使節

1615年10月29日、サンピエトロ大聖堂前の広場を白馬にまたがってパレードした支倉常長一行は、ローマ市民に大歓迎されました。図1は、イタリア側の記事をもとに描いたローマ市中パレードの情景です。サン・ファン館の展示棟にありますので、ぜひご覧ください。

ローマの入市式パレードは、賓客をローマ市が公式に迎えるための特別な儀式でした。支倉常長も日本から来た公式使節として、ローマ市が盛大に迎えたものです。支倉がローマ教皇に拝謁したあと、ローマ市議会は支倉に市民権と貴族の称号を与えています。

最大限の敬意と歓迎のしるしとして、ローマ市は入市式パレードでもてなし、貴族の称号を与えたのでした。こうしたにぎにぎしい歓迎ぶりに、支倉も相当感激したのではないでしょうか。市議会は支倉の随員にも市民権を与えています。

30年前の1585年にローマ教皇に謁見した九州の天正少年遣欧使節（図2）もローマ市民権を与えられていますが、貴族に列せられた日本人は、後にも先にも支倉が初めてでした。天正少年使節は宣教師のヴァリニャーノが日本布教の成果をローマ教皇に認知してもらうために、豊後の大友氏や長崎の大村氏など九州のキリシタン大名に語らって派遣された使節でした。いわば表敬訪問団でしたが、支倉は貿易交渉という大役が与えられていました。歴史的役割には大きな違いがあったのです。

ローマ側にとって支倉は、地球の裏側にある日本という、「遠くて新しい世界」からローマ教皇の教えと徳を慕って来た使節でしたが、遠い東洋の地まで及んでいることを証明するものだったのです。支倉使節団を歓迎する華やかなイベントは、ローマ教皇の威信を内外に示す好機でもありました。

しかも支倉は、政宗のメッセージとして宣教師の派遣を求めていました。豊臣秀吉のバテレン追放令以来、徳川家康も禁教姿勢を強めていた時期ですので、キリスト教を積極的に受け入れると明言した。ローマ教皇の威光に、二度目は入市式パレードの三日後にサンピエトロ大聖堂のミサに参列したときで、教皇から祝福の言葉をかけられています。

三度目が11月3日でした。サンピエトロ宮殿でローマ教皇に正式に謁見することをゆるされたのです。枢機卿や大司教をはじめ、多くの宮廷貴族らが列席するなかを、支倉はルイス・ソテロと共に、しずしずと教皇の前に進みました。教皇の前にひざまずくと支倉は、教皇の御足に接吻をしています（図3）。

ヨーロッパでは下位身分の者がひざまずいて、王や貴族の手に接吻をする儀礼があります。高位者への敬愛を示す作法ですが、御足への接吻は手への接吻よりも一段と深い敬愛と服従のしるしとされています。

教皇はキリストの代理人ですから、その足に口づけすることは神に仕える者への最高度の敬意と服従を、身をもって示す行為と理解されていました。

ヨーロッパでは挨拶のときに抱擁したり頬を接したりする身体接触が通常でしたから、手や足に接吻をする作法も不思議ではありません。当時の日本の武士社会では、主君に対して畳や床に額をすりつけるほど平身低頭する作法はありましたが、さすがに足に接吻をすることはありませんでした。平身低頭よりも屈辱的な作法になると思われます。

もちろん事前にソテロなどから西洋式礼儀作法を教えられたのでしょうが、支倉は西洋の新しい作法によってローマ教皇への服従を誓ったということになります。

それは洗礼をうけた支倉にとって当然の作法だったでしょう。しかしこれはたんなる宗教儀礼にとどまらず、外交上も大きな意味をもっていました。支倉はローマ教皇に対して、伊達領とメキシコとの間の貿易が実現するようスペイン国王へのとりなしを要請しています。教皇の御足への接吻は、教皇の権威を認め、その庇護と善意を求めることにつながっていました。そのおかげでしょう、教皇は伊達領への宣教師の派遣を認めると共に、スペイン国王への口添えを了解したのでした。

支倉常長の服従儀礼

支倉常長は三度、ローマ教皇パウロ五世（ラテン語ではパウルス五世）に拝謁しています。最初はローマに入った直後にクイリナーレ宮殿で非公式に、二度目は入市式パレードの三日後にサンピエトロ大聖堂のミサに参列したときで、教皇から祝福の言葉をかけられています。

三度目が11月3日でした。サンピエトロ宮殿でローマ教皇に正式に謁見することをゆるされたのです。枢機卿や大司教をはじめ、多くの宮廷貴族らが列席するなかを、支倉はルイス・ソテロと共に、しずしずと教皇の前に進みました。教皇の前にひざまずくと支倉は、教皇の御足に接吻をしています（図3）。

ヨーロッパでは下位身分の者がひざまずいて、王や貴族の手に接吻をする儀礼があります。高位者への敬愛を示す作法ですが、御足への接吻は手への接吻よりも一段と深い敬愛と服従のしるしとされています。

教皇はキリストの代理人ですから、その足に口づけすることは神に仕える者への最高度の敬意と服従を、身をもって示す行為と理解されていました。

ヨーロッパでは挨拶のときに抱擁したり頬を接したりする身体接触が通常でしたから、手や足に接吻をする作法も不思議ではありません。当時の日本の武士社会では、主君に対している伊達政宗の使者は大変好ましかったのです。

支倉を案内したルイス・ソテロも、政宗は次の皇帝になると宣伝していましたので、そう遠からずに日本がキリスト教国になるという期待も大きくなっていました。支倉を貴族に列したことには、政宗に対するローマ教皇からの好意的なメッセージが込められていたといえるでしょう。

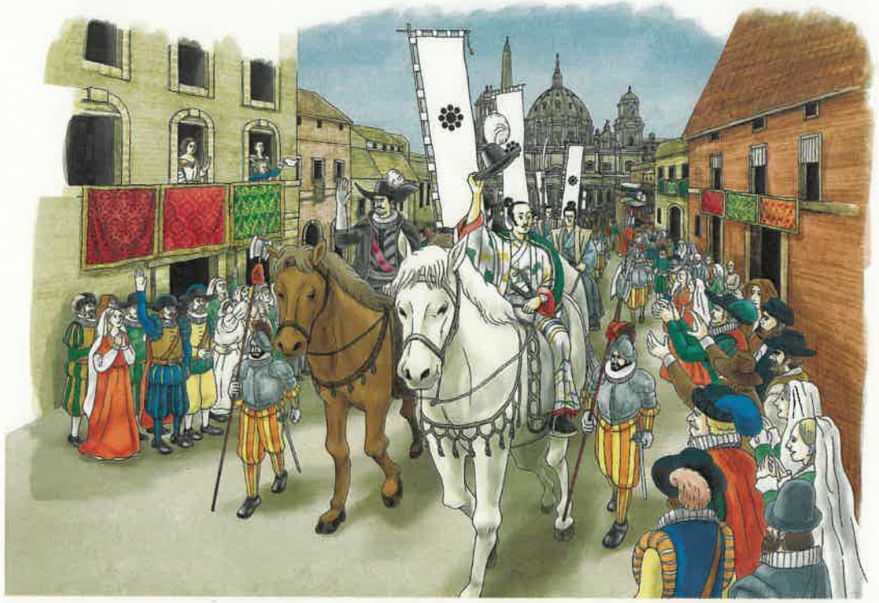

図1. ローマ入市式パレードの情景（サン・ファン館展示室）

図2. 天正遣欧少年使節の肖像画（1586年ドイツ印刷板）。出典 wikipedia

図3. ローマ教皇謁見場面（サン・ファン館展示室）

ひらかわ・あらた
昭和25年、福岡県出身。東北大学名誉教授。東北大学災害科学国際研究所の所長などを経て、平成26―31年度まで宮城学院女子大学学長を務めた。専門は日本近世史、歴史資料保全学。令和4年4月に、3代目のサン・ファン館館長に就任した。